随想　国の品格

～政治家はその国の実態を反映する鏡～

㈱ＰＰＱＣ研究所　加藤　宏光

他人事ながら、アメリカの大統領選挙が佳境に入っている。

十月十九日の東京新聞九面のコラムに、《泥仕合最終ラウンド》のタイトルで、クリントン、トランプ両候補による候補者討論会への論説がある。

クリントン氏は「トランプ氏は女性蔑視と弱いものいじめ」の候補者であるとして次のように述べている。

トランプ氏は《女性蔑視》に加えて、女性へのわいせつ行為疑惑が暴露され、十七日時点で被害者が九人に上る。

一方のクリントン氏に対しては、公務で私用メールを使っていた問題が浮かび上がった。《国務次官がＦＢＩに対して、ＦＢＩが発信した情報を含むメールを機密指定から外すよう圧力をかけていた》これが発覚。トランプ氏は「国務省はヒラリーの罪をかばうため、敵国に機密情報を流している（ウィスコンシン州の集会）」と非難した。

フィリピンのトランプ氏と呼ばれた《ドゥテルテ大統領》が来日している。彼が就任して以来、麻薬や覚醒剤に関連した容疑者が三、〇〇〇人殺された、と伝えられている（警官に直接銃殺されたのが一、二〇〇人、自警団に殺害されたのが一、八〇〇人という）。殺害されることを恐れた関係者が七〇万人も自首し、拘置所が満員というのも深刻な中にも、何となく笑えてくる。彼は、大統領選活動中に『麻薬、覚醒剤を撲滅する』と公約していた。選出されて以来その言葉どおりに行動しているといえる。そして、あまりにも過激な対応に対して、人道的であるよう求めたアメリカのオバマ大統領に対して、『オバマ、地獄へ落ちろ!!』等と、信じられない言葉を投げ掛けて、国際的な顰蹙を買っていることもよく知られている。

また、アメリカ軍との共同軍事演習も『これが最後』と述べ、また『アメリカ軍はフィリピンから出ていけ』といった、これまでの親米的な関係を終わらせようと思わせる発言をしている。

日本にいながらマスコミから得るこうした言動から受ける彼のイメージは《無軌道、尊大でワガママな人物》といったものである。著者も当初の印象は同様であった。しかし、度重なるドゥテルテ氏の激しい言葉を聞く（実際に聞く機会はない。あくまでマスコミを通しての話ではあるが）うち、少し異なった感覚で受け止めるようになった。

著者は、そのあまりにも過激で嫌米的な態度に《われわれの知らない何かあるに違いない》と感じ始めたのである。

十月二十日、二十一日とマニラ市で世界家禽疾病学会が開催された。著者もフィリピン大学からの講演を依頼されて参加してきたのであるが、その折に著者の研究所で実施したニューカッスル病の研究によって獣医学の学位を得て帰国、その後かの国で大流行しているニューカッスル病に真っ向から挑んでいる、デニス・ウマリ助教授と会って、ドゥテルテ大統領についての面白い話を聞かされた。著者から次のような質問がきっかけである。

「ドゥテルテ大統領は相当アメリカ嫌いのようだけれど、ミンダナオでの生い立ちでアメリカに対するトラウマでもあるのかしら?」

彼の答えは

「実はダバオ市長時代に酷くアメリカに裏切られてから、アメリカを信用しなくなったのです…」

このストーリはとてもスリリングである。関連するウェブニュースを要約して紹介する。

《ドゥテルテ：アメリカによるダバオ市の爆弾事件容疑者掠取 News Binastos Tay 二〇一六年十月二十二日》

ドゥテルテ大統領は「アメリカはダバオの病院から、アメリカ人であった容疑者を国外へ連れ出す、という無法を犯している」と述べている。

《Binatos tayo ng America》によれば、大統領は、二〇〇二年にアメリカ人の《Michael Terrence Meiring》の爆発物所有容疑にかかわっていた。その時点で彼は、ダバオ市長であったのだが。Meiringがエバーグリーン病院の爆破にかかわり、（酷い火傷で）病院に運ばれていた。アメリカ大使館職員はMeiringをマカティ市のメディカルセンターに「治療のため召喚し拘置する」と言って連れ出した。しかし、彼らはMeiringをまずシンガポールへ、その後アメリカへ移動させた。これに関して、BatamとRobins大使からの説明はなかった、とドゥテルテ大統領は言う。この一件でドゥテルテ大統領は《国の統治権を侵害したもの》としてアメリカの無法に対して感情的になっている。「アメリカはこの事件に対する謝罪をしていない」と大統領は話した。(Bernadette, A. Parco/NB, GMA)

別の資料（ASIA TIMES）のサイトでは、二〇〇二年の五月十六日に、硫化アンモニウム性の爆弾で爆破事件を起こしたアメリカ人Meiringは、ドゥテルテが市長をしているダバオ市のホテルでシェアリング（ルームシェアか?）をしていた。Meiringは重傷であったがアメリカ政府エージェントは病院から強制連行しマニラ経由でアメリカへ連れ去った。（中略）いずれにしろ、Meiringは彼のラストネームをVon de Meerと変えていたが、Houston ＴＶのレポーターは追跡してフィリピンに連絡していた。しかし、Meiringは引き渡されることはなく、フィリピンは彼の写真も得られず、彼の身元の確認もできなかった。Meiringは二〇一〇年にアメリカで死亡した。（後略）

こうした情報から、ドゥテルテ大統領がアメリカを憎む（彼自身は憎んでいるとは言わないが…）理由が、アメリカの独善性で主権を侵害され、加えて正義を前提として内政干渉されている、と感じるからであろう。

ドゥテルテ大統領は訪中の後に日本を訪問した。中国では二兆五、〇〇〇億円もの金を引き出し、日本から五〇〇億円に上る援助を獲得している。フィリピン人は、「これから歴史をＢＤ（ドゥテルテ前）とＡＤ（ドゥテルテ後）に分けることになるかもしれない」と言っている。

彼の八〇％にも上る支持率（甥が薬がらみで警察に殺されてもドゥテルテ大統領を支持するという女性のテレビインタビューもあった）でもうなずける。

アメリカ大統領選挙戦の泥仕合や罵りあいを見ると、政治家はその国の実態を反映する鏡であることを実感する。おりしも国連委員会で採決された《核禁止条約》に日本は反対票を投じたというニュースが流れた（二〇一六年十月二十日各紙朝刊）。アメリカから連携国へ《反対票を投じるよう》要請があったという。この国の政治家の顔が表すわが国の実態は…どう考えればよいのか迷ってしまう。